

## 編集後記

今年の冬は少しも寒くなく、毎年の体が縮む思いをする木枯らしは吹かなかつた。その分、春は足早に訪れ、入学式には校内の桜は散り急いでいた。それは十分検討もされないで四月から実施された消費税、政治家の金銭感覚のマヒの上に功名の焦りを急いだ新興経営者のリクルート・スキャンダルの舞台を、自然界もこそつて大仕掛けで演出したようにも見える。すべてが異常。

リクルート・スキャンダルは教育界、とりわけ大学にとつても無縁ではない。「リクルート」そのものは学生諸君の就職と深くかわり、リクルートルックは流行語にさえなつた。また、入学学生もリクルート情報の網をくぐつてきている。

「リクルート」に集約される仕掛けられたファクション性、意図的な情報サービスは、まさに現代社会の象徴であり、今度のスキャンダルは、その本質を裏側まで見事に見せてくれた。

ひるがえつて、わが「文学論叢」をみるに、そのようなファクション性や軽薄な所作に迎合せず、むしろ、そのような「リクルート性」の世界を相対化するほどの場になっていると自信をもつて断言できれば幸いである。

(Y・F・生、一九八九、春)

平成元年三月二十日  
平成元年三月二十五日

印刷  
発行

(非売品)

編者 愛知大学文学會  
代表者 湯本和男

印刷所 豊橋市東森岡  
有限会社三愛企画

発行所 豊橋市町畑町  
愛知大学文学會  
振替 名古屋三十四五六五四